かげろう

池上遼一

虫だッ！
ちっぽけな
汚ねえ
虫だった…！

巨大なヤクザ組織の中で、
"組長"とはどんな役割だったか!?

日本暴力団 組長

カラー作品

くみちょう

グオー
ウオーー
ウオー
ゴオーーッ!
番外地
SK

ザザザザ
ひとりぐらいは
こういう馬鹿が
いなきゃ世間の
目がさめぬ!
「死んでもらいましょ」
監督
マキノ耕作
ハア
ハア
ハア

プァァァァァーン
「死んでもらいましょ」
ギャオオーン

ゴトトン
ゴトトン
ゴトトン
ゴトトン
ゴトトン……

ドサー

ハア
ハアハア

ズルズル
クグ!
クグ!
グリーン
ズルズル

どこまで
ついて
来るんだね
………

クゥーン

ころし
ちゃうんだろ
これ……
おじさん

おれんだ!
おれが
ひろって
きたん
だぞーっ
かえせ
よーっ

グオオオオオ

ギァァァァァッ

うそだーい
嘘じゃないったら……じゃホラこれを見てごらん

ここで切れているだろう……
こんなに太い針金でつくられたカネだって犬の歯にかかったらたちまち切断されちまうんだよ

わかるだろう……

犬はね
恐ろしい
獣なんだよ
……

だから
殺すんだよ
……
おじさんは
……

ザラ ザラ ザラ

さあ
もう
お帰り!

グビ グビ

ゴホ ゴホ ゴホー

コトコトコト

本当に捨ててきたんでしょうね
……これからあんな犬拾ってくるんじゃない、ことよ
………

まま！
さかなは
いぬみたいに
かめんを
つけていないね
びすけっとや
ぎゅうにゅうが
ほしかったら
するどいはを
かくしてれば
いいのに……

まあ
仮面だなんて
誰に
教わったの？
魚は
ね！

ワン公
みたいに、
恐くない
の！
……
煮すぎ
たかな
さあ
どいた
どいた

トン
トン
トン

シュリッ
シュリッ

ゴオッ

キイイ———ン

ガヤ
ガヤ
ガャ

おじさん！

ん？…
なんだ昨日の坊やか…

なるほど今日は幼稚園の飛行場見学だね

ほほうこりゃぁ苗字も名もいいじゃないか
けんもち いさお

おじさんこれきのうのいぬとちがうね……

ハハハ！いさおくん！きみは飛行機が恐いんだろう……
！
こわくなんかないよ！

そうかな？昨日は耳をおさえて……

あれは……
あのとき
は……

こわいけど
すき
なんだ
よ――っ

みなさ――ん
集まりましょう

ベ――ッ

タタタッ

K市保健所
獣医衛生課

はあ……
鶏十羽に
ネズミが……

あんた
ネズミぐらい…
ああ
二十日ネズミ
でっか…

とにかく
我々としても
全力投球して
まんねん……
はあ

トントントン

うわ――っ
もう
六時や!

宿直室

ガタガタ

よぉ
やって
まんな
東条
はん

へへへ
伊藤さん
お宅も
一パイ
どうです

いやぁ
きょうは
私、遠慮
させて
もらいま

ウ〜〜イ
……
へへへ
いやあ
毎月〳〵
被害報告の
多いのには
イヤんなる
なあ……

アメリカはんも
ひどいこと
しやがる
……
基地設けるのは
こりゃ、もう
しょうがない……
許せんのは本国に
帰還する米人や
屑物といっしょに
平気で飼犬
遺棄して
いきよる
さかいな

そいつらが
どんどん
野犬化
しよる…
へへへ、
……
へへ…

身体大切に
してやぁ…
東条はん
どんな仕事
でも
身体が資本や
さかいなあ…

我々はね
あんただけが
たより
なんや……
今どこの
保健所でも捕獲人を
求めている……
東条はん
あんたは貴重な
存在やで！

へへへ……
そりゃア
もう
わかって
おります
ヒック
……
ウ〜イ
ハハハ
なんや
きょうは
えらい
機嫌が
ええや
ないか

なんぞ
ええ事
……
へ——ッ
東条はんに
こんな趣味
あったん
でっか!?

やはり独り身はいいや！

52型ですよ

ふうん零式戦闘機か……懐かしいなあ

そうかあんた……

神風特攻隊の生き残りです……

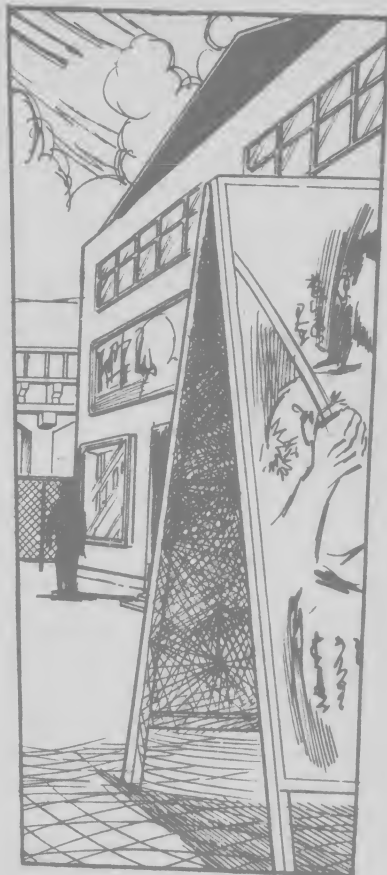
ザザーン

SUNTORY
WHISKY

ヒック

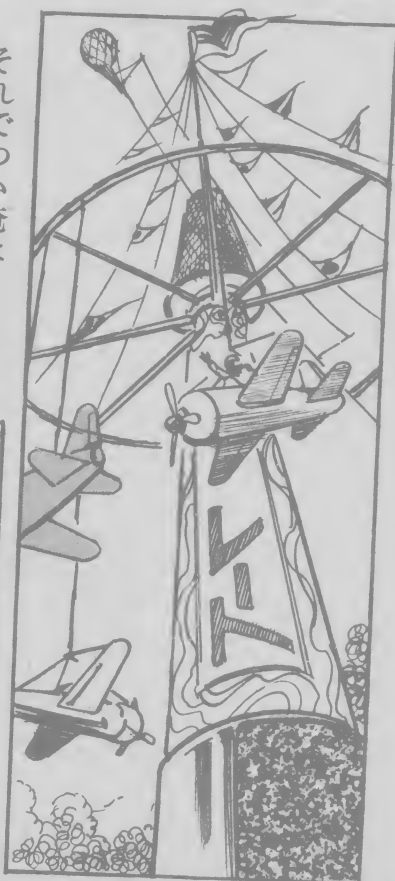
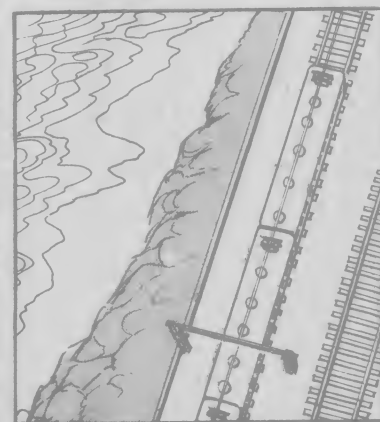
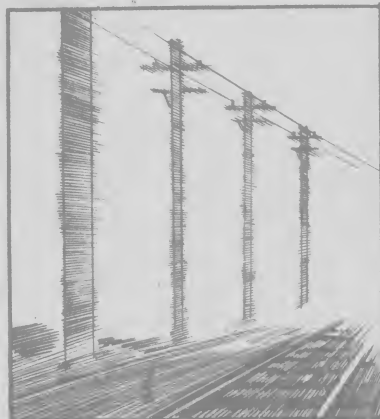
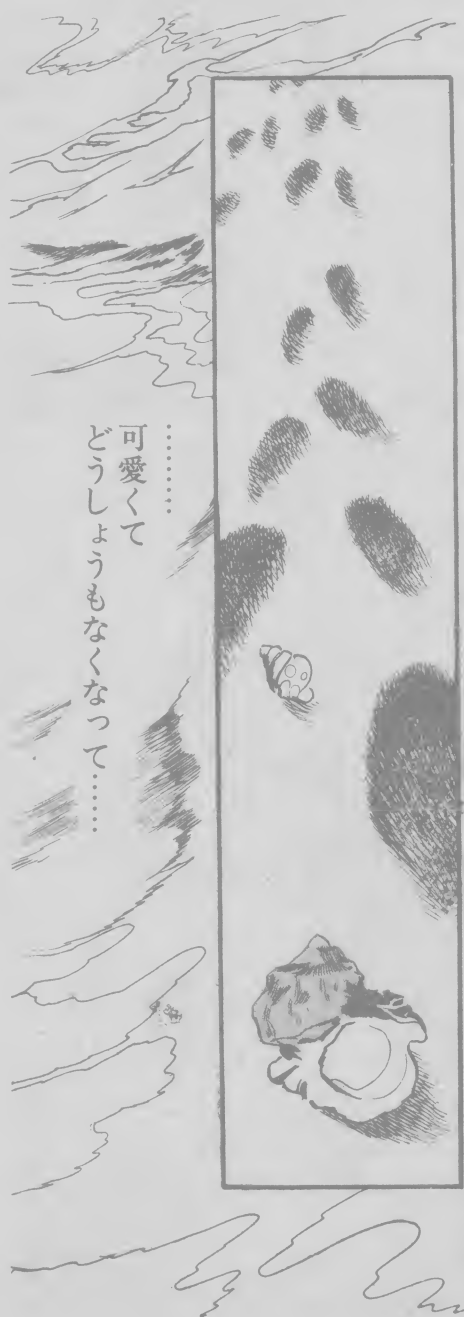
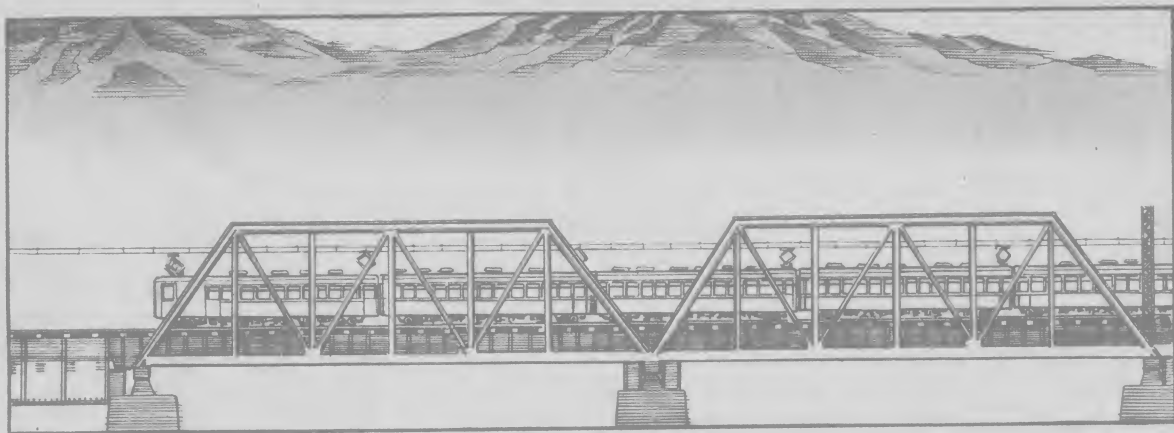
俺は…
何故あの子供と
いっしょに今こうして
海へ来ているのだ
……ヒック……

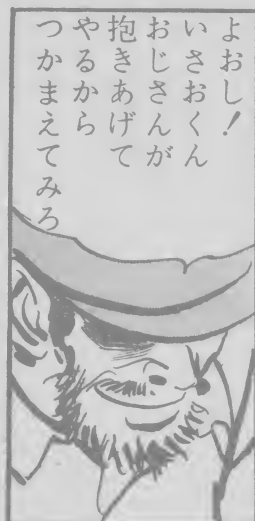
それも
こんな突堤の
先端に立っている…？
ひどく酔ってるな……
一体
どうしたというのだ……

そうだ……
きょうの昼だった……
あの劇場の前で
また偶然子供に
出会ったのだ……
最初から子供に
やるつもりで買った
飛行機——
俺はすぐ
それを見せた……

すごかったな……
あいつの
悦びようときたら……
ヒック

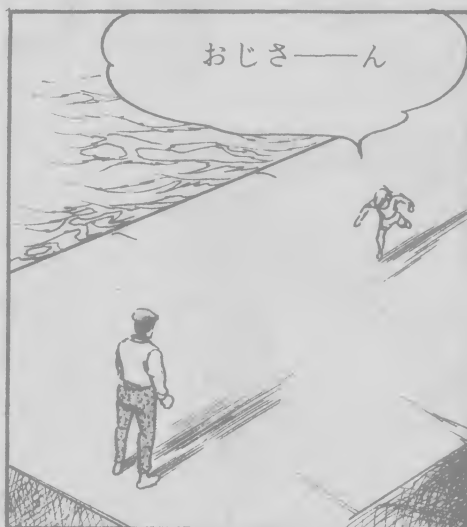
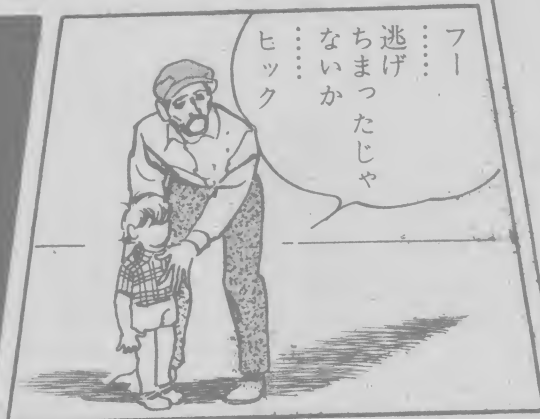
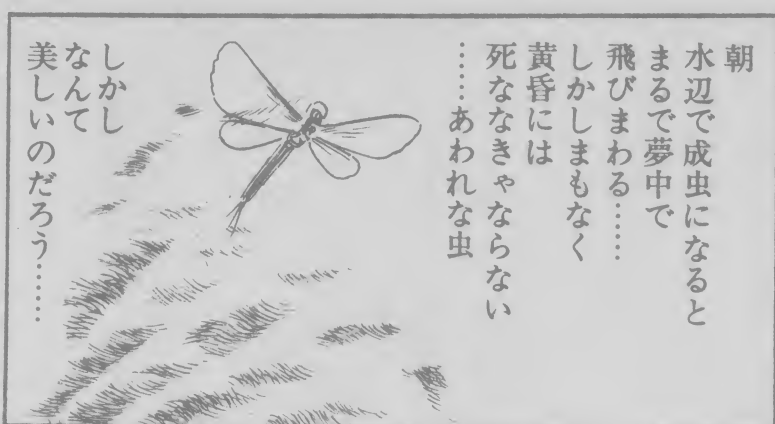
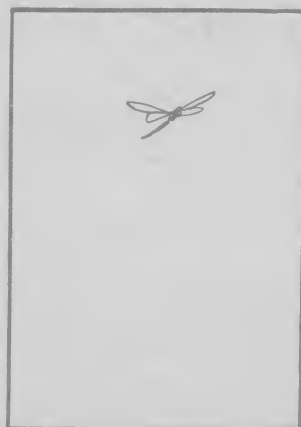
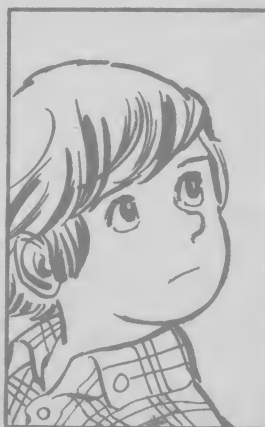
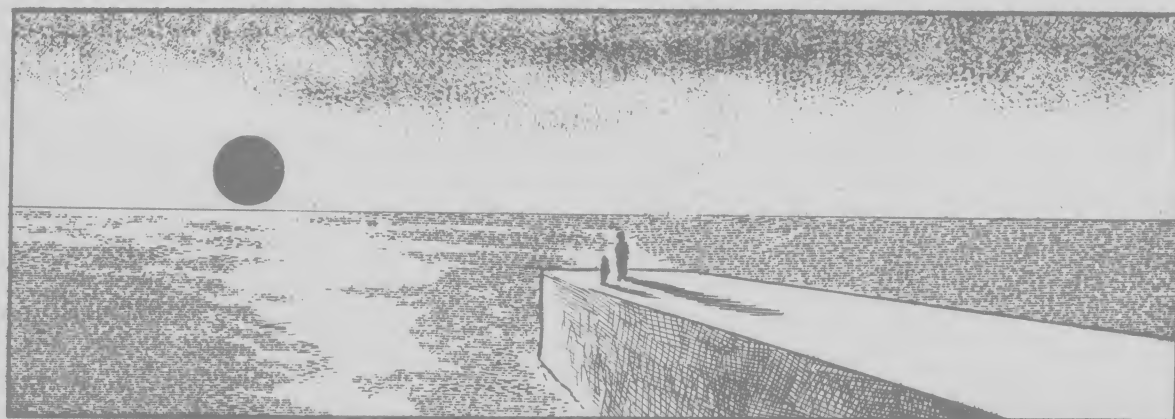
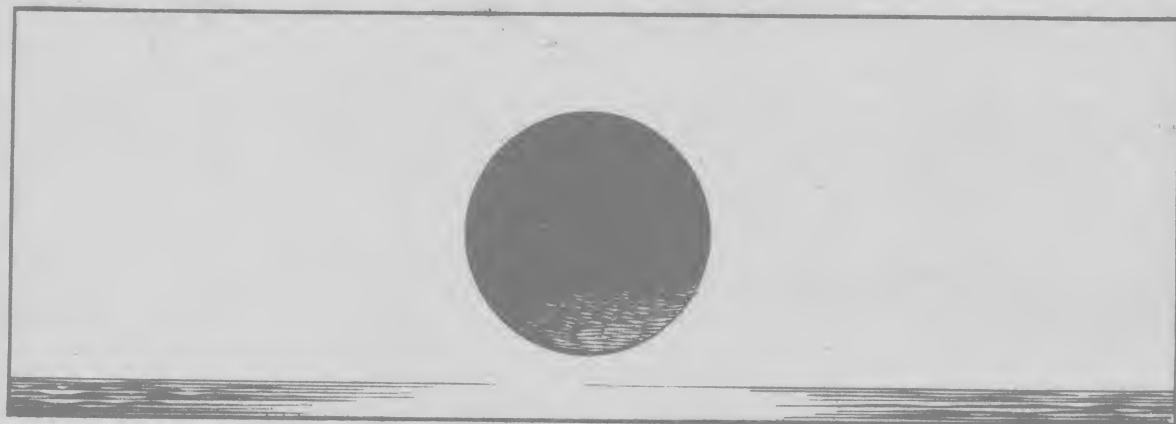
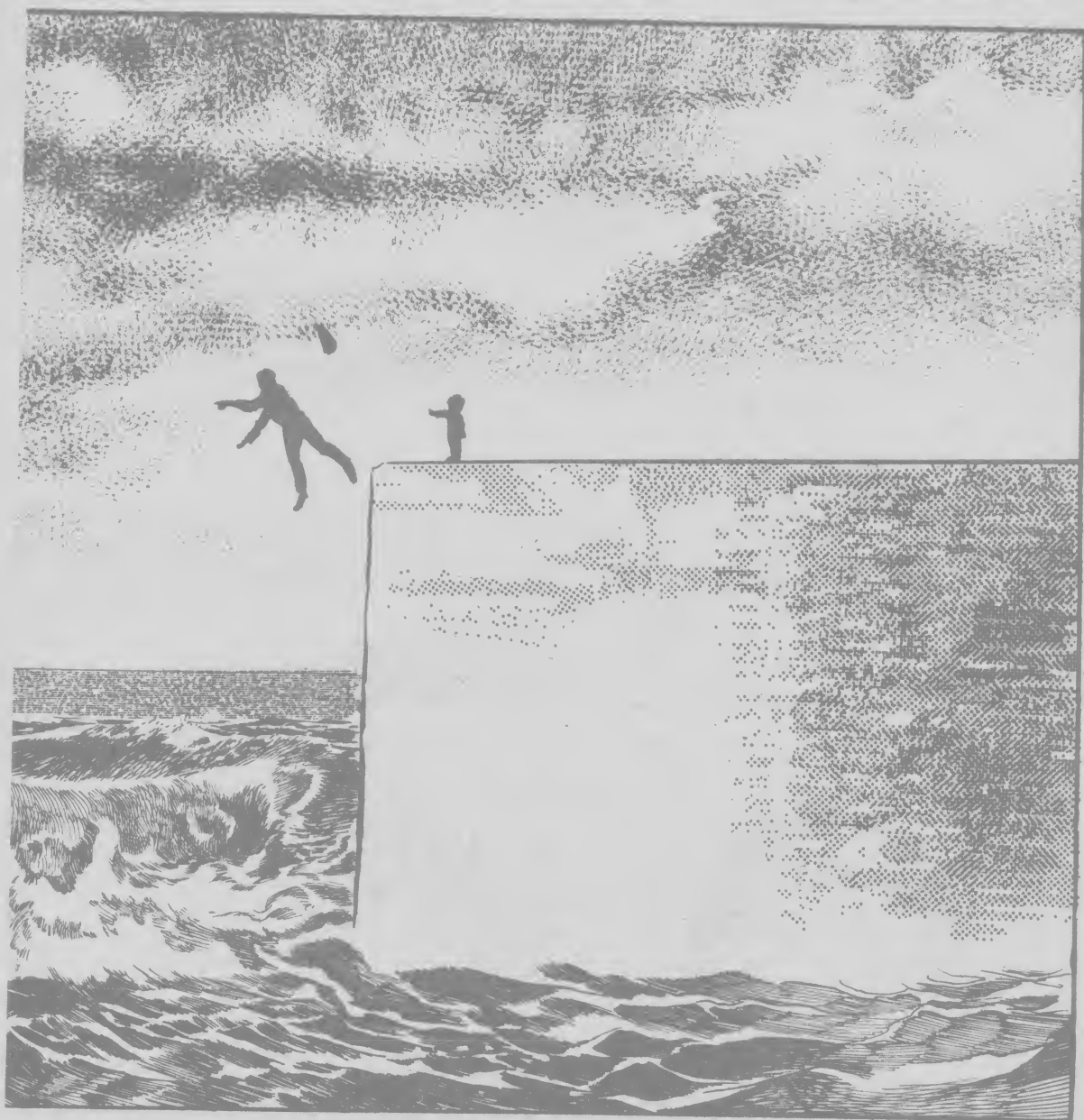
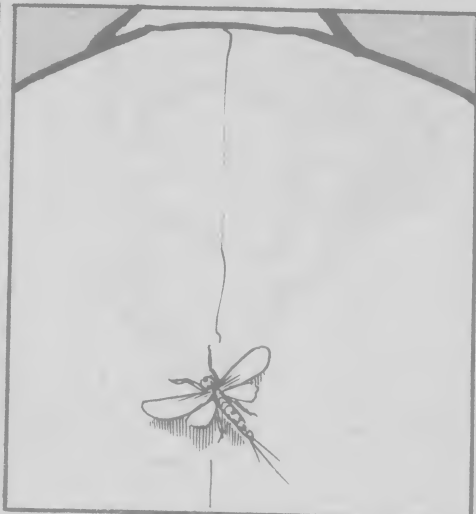
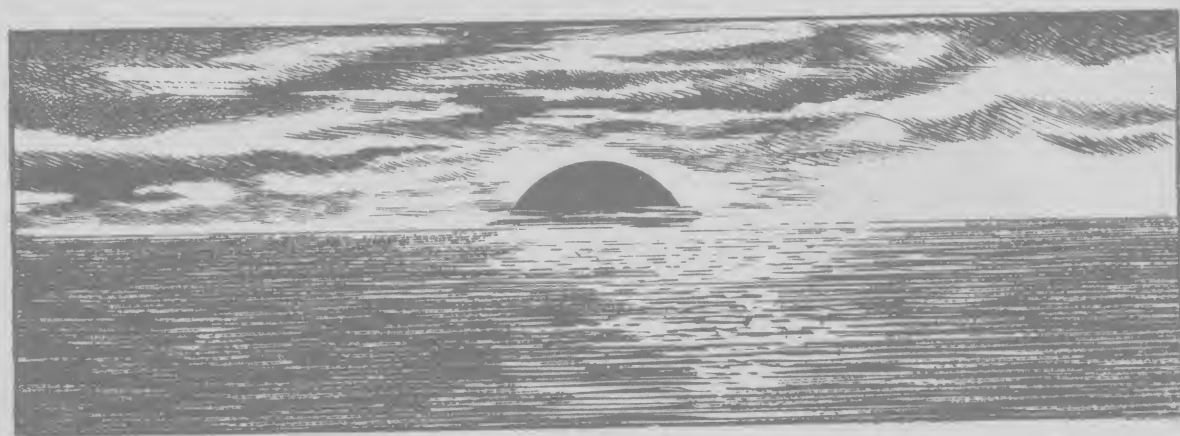
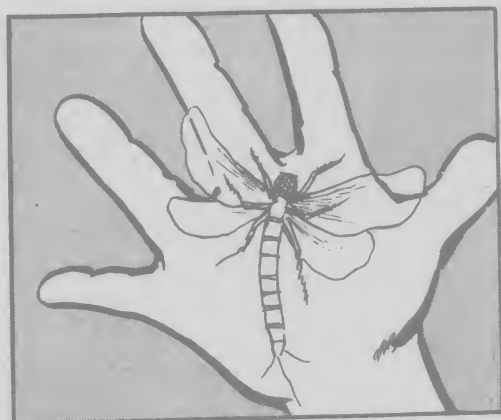
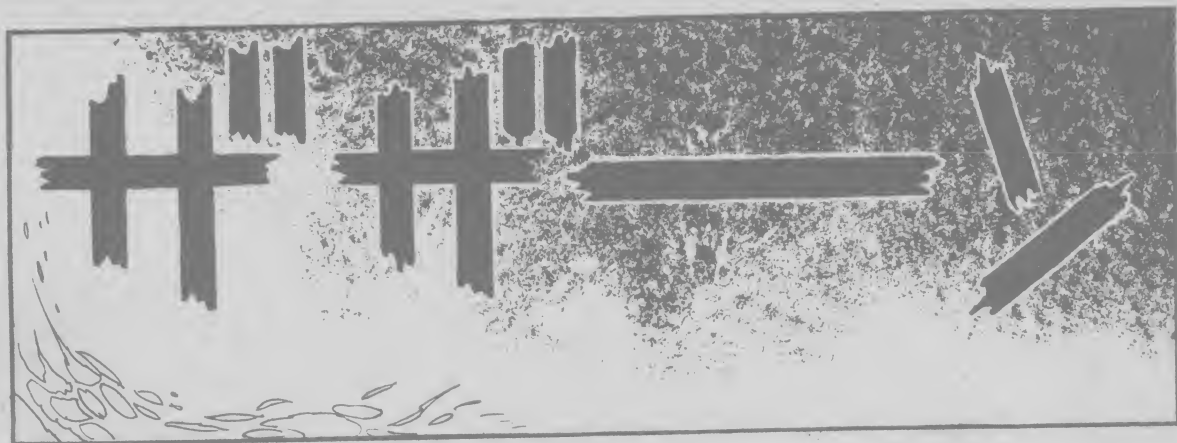
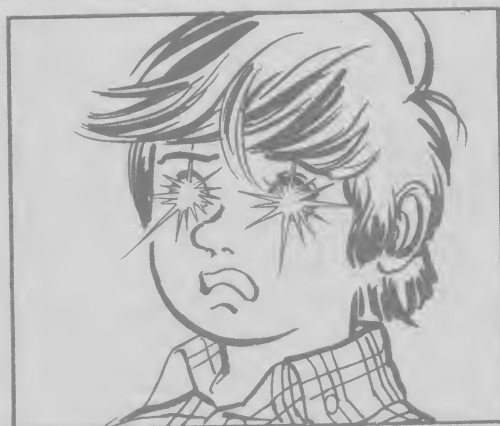
それでつい俺は
子供を遊園地に
誘ったんだ……
だって飛行機に
乗せてやれば
もっと悦ぶ
だろうから——

本当に
なんて
可愛いい
やつなんだ……

……可愛くて
どうしょうもなくなって……

いつのまにか
ここへ
来ていたと
いうのか……
しかし……
何故海で
なくては
ならなかった
のだろう……

おじさ――ん

とんぼだよ
とんぼが
とんでるよ！

よおし！
いさおくん
おじさんが
抱きあげて
やるから
つかまえてみろ

そうら
……

そらそら どうした…… ホレ
もっと 手を のばして ……
え？ どうしたん だい…………
フー…… 逃げ ちまったじゃ ないか…… ヒック
……オヤ？ あれは とんぼじゃ ないぜ……
蜉蝣（かげろう）だよ！
………
蜉蝣が どうしてまた 海などへ……

朝
水辺で成虫になると
まるで夢中で
飛びまわる……
しかしまもなく
黄昏には
死ななきゃならない
……あわれな虫
しかし
なんて
美しいのだろう……

……そうか……
俺は……
この海に沈む夕日を
見たかったのだ……
……あの時代(とき)の
日の丸を………

かげろう

完

1969．7

今月の本棚

佐藤忠男著　黒沢明の世界

わが国において映画について書かれた本は数々あれど、一人の映画作家を論じた本となるとほんの数える程度。もしあったとしても、ゴダール。ところが、海外では、溝口健二、黒沢明らに関する研究書が出版されている。それをまた邦訳して読まなければならない、というのが現状なのだ。従って、今度、映画評論家の佐藤忠男氏によって書き下された本書は、まさに画期的な労作といわなければならないはず。

黒沢明といえば、巨匠・天皇などといわれ、何とはなしに遠い存在になりつつあるけれど、著者は、黒沢の監督昇進以前のシナリオをはじめとして、「酔ひどれ天使」「羅生門」「生きる」と全作品を通じて黒沢映画を執拗に追いかける。それはまた、黒沢映画に夢中になった著者の青春とその時代へのこだわりでもある。

先ず著者は、戦時下多くの映画作家が戦争協力映画を制作していったのに対して、黒沢がそれらとは違った独自の道を歩んだのは何故かを問い、黒沢は、日本の伝統的な視覚文化への愛着と、時勢に従ってくるくる考え方の変わる大衆や時勢に超然として自分の態度を一貫させてゆく立派な人物とを描き、本心を偽らなかったと見る。だから、戦後になって、戦争協力を反省し民主主義的映画をつくった人たちとは違って、戦時中の作品をけっして否定してはいないと説き、戦時中の日本人の軽薄さを自己批判することも大事だが、それ以上に敗戦に便乗して個人的な恨みを責任問題にこじつける人たちを批判すること、そして日本人は従順であることをやめなければならないと考えていたのだろうと。

絶対に従順であるまいとすること、それこそ悪であり、それは奴隷のような善人よりマシであるという視点が「七人の侍」や「用心棒」のサムライの描き方に顕著であると指摘する。著者は、黒沢映画から日本人論、戦中戦後論をも展開してすこぶる興味深い。

▽八五〇円・三一書房刊

ハンター・デイビス著　ビートルズ

「彼らはまだ若い。それを否定するわけにはいくまい。若さは結構なことである。なぜなら彼らはあいかわらず独力でいろいろなことをやりたがっているからだ。その試みをつづけてほしいものである」

常に他人のやらないことを手がけてきた反逆児。既成のものへの反抗がビートルズの発展であり、彼らに新しいものの創造を可能とさせてきた。

ビートルズに魅きつけられた著者が、なおその今後に期待をこめて書いたビートルズの記録である。インタビュー等による裏付けで四人の個性的な人間像を浮かびあがらせ、彼らにまつわる数多くの伝説をくつがえし、あるいは更に印象づける。そして、今なおつづく彼らの不可思議な言動も、ここに明らかにされたその素質によって充分納得できるものであろう。

全世界を風びした四人の著者に対する、単なる興味ではなく、もちろんファンへのアピールでもない。生身のビートルズを記すことによる、自由奔放な生き方、最も非モハン的な生き方を示した彼らへの共感であり、愛情であり、称賛である。

（小笠原豊樹・中田耕治訳）

▽八八〇円・草思社刊

青地　晨著　冤罪の恐怖

丸正運送店の店主、小出千代子が殺された丸正事件（昭和30年）の犯人は、その当時丸正に出入りしていた長距離トラックの運転手、李とその助手の鈴木の二人である。35年に李が無期、鈴木は十五年の刑が確定して以来、現在なお二人は服役中である。畳の上にうつぶせになっていた千代子の死体が発見されたのは、午前二時過ぎ。店の一部で洋服部を営み、店の二階に住んでいた千代子の実兄夫婦が、その殺害に気づかない時間をみはからったと判断されたために、ちょうど午前一時すぎに沼津から東京に向けて出発した、トラックの乗員二人があげられた。ところが、鈴木の自白は捜査の進行と共に猫の目のようにギコチなく変形し、調書には疑問な点やつじつまのあわない点が多々あった。店の土間で首を絞めて畳の上に運んだという千代子の足裏は湯上りのように白い。寝巻には尿の失禁が認められたが、土間にも畳にも尿が発見されない。着物がキチンと左あわせになっている。犯行時間は午前一時過ぎというが、解剖の結果は、死亡時間を前日の午後十一時半前であることを確認。顔の血痕や犯行の所要時間などからみても、二人の犯行ときめつけるキメ手にはなり得ていない。それでも二人は懲役囚になってしまった。

丸正事件ばかりではない。〝疑わしきは罰せず〟からはみ出した事件はずいぶんある。この本は、帝銀事件、福岡事件、竜門事件など七つの冤罪事件を追求している。

かつて、架空の事件、横浜事件に連座して裁かれる立場に立たされ、嘘の自白をした著者はいう。「こんどは屈しないであろうか。真実をつらぬきとおすであろうか。残念だがそうした自信は私にはない」権力の非情さ、むごたらしさにはうちかてないからである。「誤った裁判で被告の生命が奪われた場合、これほど残虐で非人道的な殺人はない。死刑は予告された殺人なのだから……」。

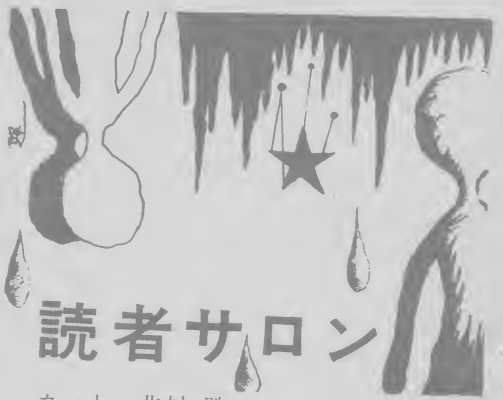
▽四二〇円・毎日新聞社刊

月報

▼広告欄でご案内したように9月下旬に『滝田ゆう作品集』を発行いたします。本書は、「ガロ」に発表した「寺島町奇譚」八話に書き下し作品一篇を加えたものです。ほかに随筆絵物語「玉の井今昔」を執筆の予定です。品切れにならないうちにお早めにお申込み下さい。

本書にひきつづき『白土三平作品集』『水木しげる作品集』『永島慎二作品集』『林静一作品集』『佐々木マキ作品集』等々逐次刊行していく予定です。

▼「ガロ」10月臨時増刊号として「勝又進特集」をおとどけいたします。滝田ゆう、佐々木マキ、林静一氏らが勝又氏の人と作品について執筆します。9月15日発行、ご期待下さい。

▼正統派劇画の後継者である楠勝平、池上遼一氏がしばらくぶりに作品を発表しましたが、今後も続けて発表していきます。

読者サロン

カット・北村 跌

カズエさんとお話したい

森井広子（新潟・20歳）

漫画は漫画でも高級（?）な漫画といったら「ガロ」をおいて他にはないんじゃないでしょうか？　すごーくレベルが高いんですよネ。だから読者も秀才ばかりそろっているような感じがしちゃって。「読者サロン」を読む時、辞書をそばにおいて読む人間もいるということ、忘れないで欲しいナ。その哲学的な言葉にまるで弱い人間が初めに読んじゃうのは、滝田のおじさまの「寺島町」シリーズ。気楽に読めちゃうから好き。でてくる言葉も古いなつかしい言葉が多いところが又々気に入ってるの。登場人物の一人一人にものすごく親しみを感じちゃいます。とくにキヨシ君にはネ。毎月読んでいるうちに本当に寺島町に行ってみたくなっちゃいました。「ドン」に行ってカズエさんとお話したいなあーナンテ思ったりネ。でも、女の子じゃォカシイ（?）かしらネ。

次に佐々木マキおにいさまの作品について一言。漫画という気がしないみたい。かといって劇画でも全然ないでしょ。イラストの集まりみたいなところもあるけど……。でもとにかくオモシロイんです。見ていて何を意味するのか、だいたいわかるんですネ。時々、ビートルズの連中がでてくるでしょ、好きなの、とっても。マキおにいさまってポピュラーが好きなんじゃないかしら？　ちょっぴり古いけれど、「レボリューション」の感じ。マキおにいさまの作品を見るたびに、その曲を思い出すんです。

反対にポピュラーじゃなくて、歌謡曲になると林静一おにいさまの作品になっちゃう。それも時によって古ーい歌謡曲がでてくるでしょ。登場する女性も竹久夢二調の絵ですばらしいですよネ。静一おにいさまの理想（?）の女性ってわかるような気がしちゃいます。だいぶ前の作品「花の詩」なんかビートルズのアニメーション映画「イエローサブマリン」とどこかが似ているみたいな感じでしたけど。あの主人公の23歳クンなんか、ジョンに似ていたわ。あれ、映画にしてもいいんじゃないかしら？　私個人としては大好きデス。

他にも、つりたくにこさんとかつげ忠男氏、勝又進氏ETC…。個性の強すぎる人達ばかりで言いたいことはたくさんあるけれど、この次にします。「ガロ」がなくては生きていけない20歳の女のコより。

近頃おもしろくないね

藤田準治（大阪）

「カムイ伝」が「カムイ伝」らしくなりましたね。しつこいやっちゃ、と思われるでしょうが、一〇〇頁まであと一一頁ですね。つりたくにこもよかった。「萬古屋事件始末」もよかった。つりたくにこもよかった。するとこれは七月号を見たときのはがきの答だったのであったのか!?　あの志能便の絵物語はどうなったのですか。「雨季（一）」とあるからには、（二）があるのでしょうか。しつこい男の言い分としては水ぶくれはイヤなのですが。絵は兄貴に似てますがヤハリソノ……。対談を載せて言い訳にはならんと思っとんやが。つげ義春氏の六〇枚が〃予定〃とは嬉しいような心配なような。

本屋に毎月もってくるように頼んであるんですが、そうすると臨時増刊号もみなもってくる。義春のは値打ちもんでしたが。臨増ってえのはもうかるんですかね。下らんのがつづくとつい……貧乏人の性。気にせんでください。（えへへ）

「赤地点」、短いからいいようなものの、彼の作品に情況の呈示があるんですかねえ。佐々木さん、大きいクツですね、人間がチッチャイのかね。そんなことよりねえねえ、ガロとゴロ、どうですかね。

つりたさんとのお話のページ。（はがきの一円分を特に割り当てました）　非村の表情がいいですねえ。こんな口唇の人の最後、アワレをもよおした。判官の登場、あんまり満足しなかった。デモ、トッテモヨカッタ。アガッテシマッテ、シドロモドロ。ゴメンネ。

「目安箱」どうぞごゆっくりお休みなさい。

このあいだ人が来て「ガロ」もってっておもしろいって、またもってって。人が来ると、おもしろいとネコロンデ読んでそれでじぶんも初めの頃のを読んでると、ああこんなだったかとおもしろくて、人が（これは次から次から人の新しいのを読む人）このごろあんまりおもしろくないね、というと、うんうんとへんじしています。七月号の楠さんもあまりよくない。義春さんが「ねじ式」みたいすごいのをだしたからって、あせらなくともじぶんもいいものかいてたやんか。あのね、たいだんやさんのためにマンガかくのは邪道でしょう、ね。

とにかく「ガロ」が好き!!

斉藤裕子（千葉・17歳）

「ガロ」を初めて手にとってから、早くも二年近くたってしまった。その間、白土三平やつげ義春に心を舞わせ、佐々木マキに嘆息して日々を送り、すっかり彼らが私の生活の一部分になってしまったように感じられる今日この頃である。私は、この「読者サロン」に寄せられる方々の文章を読んでは、その度毎に「非常に高級」な所見に驚かされる。まったくすばらしいとしかいいようのないほどの佐々木マキ氏らに対する分析、それのなんと多いこと！　おかげて私は「ガロ」を読み続ける自信を失うことが、しばしばである。

私が「ガロ」を読むのは、何も自分の分析能力をためすためでもなんでもない。ただ好きだから、おもしろいから、それだけの理由でしかない。白土三平も好きなら、林静一も滝田ゆうも、そして永島慎二も大好きである。それがたまらなくうれしいのである。

だが、強いていえば、私の「ガロ」を読まずにいられない大きな要因に「カムイ伝」がある。確かに、以前と比較すると活気が乏しくなったことを否定はできないが、私にとっては「いつまでも終わりのないことをひたすら願う」作品なのだ。精神的成長期にあった私の心をしっ

かりととらえ、現実に目を向けさせる指針となったものとして忘れることはできない。まったく、よい時期に巡り会ったものだと感謝さえしているほどだ。
その私が、特に「カムイ伝」を賞讃する理由の一つに、この作品の持つスケールの雄大さがある。江戸時代という得体の知れぬ中でうごめく人間模様をこうも生々しく、かつ的確に描写した作品は、あまり類を見ないのではなかろうか。ああ、江戸時代なんかに生まれなくてよかった、そう思いつつ、次の瞬間には、現代という更に恐ろしいものを思い出し、改めてその恐ろしさを認識するのだ。
そして、理由の第二は、白土氏の人間に対する信頼感の上に立った人間描写である。（滝田ゆう氏もそうだと思うが）現代社会は、時代の過度期にさしかかり、むやみやたらに造反が叫ばれて、人間相互の愛や信頼感はないがしろにされてゆく風潮がある。人は、マルクス主義を唱えながらも、個人主義に片寄り、自らの殻にとじこもりがちである。そんな中で古い古いとあちこちから非難の声があがるにもかかわらず、ただひたすらいつ果てるとも知れぬ「カムイ伝」を描き続ける白土氏には、全くうれしくなってしまうのだ。
以上、白土氏のことをも述べさせていただいたが、氏に限らず、とにかく「ガロ」はおもしろいと思う。深い思想とともに「ガロ」を読まれる数多くの読者諸氏には、まるで少女雑誌でも見るかの如くの私に、あきれた目を向ける方もおありだろう。だが、ときには、「カムイみたいな男の子が大好きだから、どうしてもガロを買っちゃうの」といったたぐいの読者も、こうしているんだということを、おわかりになってほしいのである。

致命傷とエロス存在

能澤寿彦（東京）

芥川の「或る阿呆の一生」に縊死実験をする話があるが、そこで主人公（芥川）は荒々しい鶏の声を聞く。まさしく鶏の、が、同時に何処にもいない鶏のそれでもあるところの。芥川の内の、とある極限をなぞるものとしてその声は〃現存〃し、それは現実界の尺度を越えた次元の尺度であったのではないだろうか。芥川は自殺に至るが、もし我々が彼の死を見据えようとするなら、結局、鶏の声（或いは河童）とかいう非人為的〃自然〃との緊張関係に於て何とか手探りするほかあるまい。〃自然〃は、また、かくある私の存在を荒々しく引き裂く裂け目でもある。身をうがつ斧の予感なしに語られる〃人間性〃は何ほどのものでもないだろう。まさしく「沼」（つげ義春）によって、入り組みながらに発露しているのは致命傷としての人間性であろう。ラストの銃声は、芥川の鶏の声にも通ずる。つまり、人為理解を絶する限りに於いて現存する〃自然〃の顕現ではなかろうか。「沼」の女の孤絶は、何ものかを希求する。彼女の見たものは、猟人と雁、或いは、蛇と卵に於ける関係、即ち、加虐・被加虐の残酷さにありながら、しかも、連続性（非孤絶的）を内に秘めた或る種の自然だったのでは。が、それらは彼女の外部のものでしかない。しかも連続性という魅惑。外部のものを内部へ。猟人に対する誘惑としての彼女の意図。それはドラマへの意志でもある。彼女は巧妙ではある。眠りによって、彼女の具体的（人為的）誘惑を自已否定しながらに、しかも、至高の連続性を完成させようと企む。が、真夜中の彼女の悲嘆は何なのか。ドラマは可能だったのか？ 私にはそれが、至高からの裏切りによる、と同時に、その限りに於いて発露する、人間の限界に震える魂の悲嘆だと思われてならない。朝は空虚である。銃声とは何か？ 不可能だった至高、しかも、逆立しながらに噴出した〃人間性〃……に対する、とある激しく、かつ、隠微な——非人為と関連したところの——呼応ではなかったとしたら。つげ氏は「沼」から「ねじ式」へという、いわば、あの銃声の空間化とでも言うべき不可解極まる空間へ突き進むわけだが、それでも、致命傷意識としての人間性（血管の切断）が強く基調をなしているようには思われる。又、血が止まる（一応は）という現象が、性体験、（それは想起以上の意味を持つ）というエロスの領域に集中していることは何かを暗示するようでもある。ところで、西洋に〃神の死〃があり、なお、人間が生きるにあたっての不条理の宿命、その致命傷を更にうがつことによってしか生の現存を生きぬくことが出来なかった存在——バタイユとそのグループの狂躁的実存の思索は、そうした背景があったが、そこで極めて霊妙なあり方でのエロスが前面に、即ち、神の死後の神（こう考えるならば）との緊張関係によって発露することになる。東洋風土には神の死はないが、しかし、日本に於てもそれなりに深遠なテーマはあったように思う。自我崩壊を苛烈に生きぬいた原口統三、殺人不条理にかけた小松川事件の李死刑囚、虚無とド巫山戯の相互浸透に文学成立をかけた太宰、そして、逆説神話を志向する三島がいるとき、そうした中でつげ義春を位置づけようとするとき、いわば、致命傷とエロスの発想とでも言うべきものが出て来るように思う。
（なお、つげ氏の抒情志向の一面もそれなりに優れているとは思います）

マンガに関する参考文献案内

●**ああマンガ全盛時代** 「週刊読売」6月27日号
●**漫画漫見—〃平和〃の中の不安を反映** 北杜夫 「読売新聞」6月23日号
●**現代漫画天国眺望図—ユーモアから反漫画まで** 「週刊読書人」7月14日号
●**「ガロ」編集長奮戦中** 長井勝一 「中央公論」8月号
●**大学生とマンガ—匿名の非芸術性** 石子順造 「早稲田大学新聞」5月31日号
●**サラリーマン漫画をおもしろがるのは** 「サンデー毎日」7月13日号
●**続・マンガ文化論** 「毎日新聞」7月8日号〜12日号
●**自己探究の旅—僕自身のつげ義春「ねじ式」** 「三田新聞」6月18日号